

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：正司哲朗<sup>(1)</sup>、千田嘉博<sup>(1)</sup>、臼杵勲<sup>(2)</sup>、L.イシツェレン<sup>(3)</sup>、CH.アマルトゥヴシン<sup>(3)</sup>、  
G.エレグゼン、青木麻佑花<sup>(1)</sup>

氏名のローマ字表記：Tetsuo Shoji, Yoshihiro Senda, Isao Usuki, L.Ishitseren,  
CH.Amartuvshin, G.Eregzen,Mayuka Aoki

所属：<sup>(1)</sup>奈良大学、<sup>(2)</sup>札幌学院大学、<sup>(3)</sup>モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所

専門分野：情報メディア

発表のタイトル：モンゴル国における 18 世紀の寺院都市ゾーン・フレーのデジタルアーカイブと構造解明

発表要旨（600 字～800 字程度）：

モンゴル国には、世界遺産を含む数多くの遺跡が存在するが、遺跡の保護・保存が制度・体制・方法的に進んでおらず、あと数年のうちに、崩壊してしまうものも多数存在する。モンゴルの位置する草原地帯は、長期にわたりユーラシアの文化交流・交易の中心であったため、その歴史的文化遺産が失われていることは、モンゴル国のみならず世界史上の大きな損失である。

本研究の調査地域は、モンゴル国トゥブ県ムングモリット村にあるホスティング・ボラグ遺跡群に位置する。ホスティング・ボラグ遺跡群やその周辺には、青銅器時代の墓群や匈奴時代の工房跡・土城跡、突厥時代の遺跡、18 世紀の寺院跡等、年代の異なる遺跡群が数多く存在し、非常に興味深い地域でもある。

本研究の目的は、清朝時代の大型ラマ教寺院ゾーン・フレーのデジタル化と構造解明である。ゾーン・フレーは、ザナバザル（1935 年～1723 年）によって、1711 年に建立された寺院であり、1940 年頃まで造営されていたが、モンゴル革命時には、完全に破壊されたが、造営されていた 1911 年にはロシア隊の調査が行われ、寺院を撮影した写真も残されている。

ゾーン・フレーは、地上において痕跡が少なく、衛星画像からも解像度が低いため、全体構造が不明である。このため、2016 年度、2016 年度の調査において、まずは全体構造を把握するために、ドローン（無人機）による空撮を行い、撮影された画像群を合成し、高解像度のゾーン・フレーの画像を取得した。次に、取得したゾーン・フレーの画像をもとに、寺院全体の構造について考察し、中央寺院の構造、ゾーン・フレー周辺にある基壇跡の確認、盗掘により散乱した仏像破片などの確認を行った。さらに、ゾーン・フレーから少し離れた場所にも、新たに清朝時代の遺構があることを確認した。